

2012年12月14日 発行

2014年2月26日 改訂

どなたでもいつの会でも参加できます

森三郎刈谷市民の会

「森三郎の作品を読む会」

11月の「森三郎の作品を読む会」では、

「赤いポスト（童話）」筆名 須川よし子

「るぐひ太郎（昔話）」筆名 茅原順三
を読みました。

「赤いポスト」、「るぐひ太郎」は一九三二（昭和六）年、「赤い鳥」九月号に掲載されている。同じ号に初めて二作載った。



昭和6年9月号表紙

「かぶとむし」

画 清水良雄

「赤いポスト」は「ファイルマンによる」と末尾に注書きがあるように、海外作品の再話である。しかも「須川よし子」と、女性名を筆名にしている。

同年三月号で初めて「赤い鳥」に掲載された「赤穴宗右衛門兄弟」以降、森三郎の作品は日本の古典や昔話、海外作品と、さまざまなジャンルの読書を背景にしていることがわかる。兄、森銚三の影響か、子どもの頃から兄に負けない読書量があったのだろう。

次回予告 平成25年1月11日（金）午後1時～3時

赤い鳥 昭和6年11月号初出（「森三郎童話選集夜長物語」所収）

「かうもり傘」・「三条中納言」

「るぐひ太郎」は狂言「居杭」を素材としている。

（あらすじ）るぐひ太郎には、ひどいけちんぼで大金持ちのおじがいた。このおじには変わった癖があって、会うたびにぴしゃりぴしゃりと顔をぶつので、太郎は閉口していた。そこで清水の観音さまにこもってお祈りをし、姿が消える不思議な頭巾を手に入れる。

るぐひ太郎は、おじの家に行き、この頭巾をかぶっていつもの仕返しに叔父をからかう。声はすれど姿の見えない太郎を見つけようと、おじはちやうど来合わせた山伏に太郎を探させる。そこで太郎は山伏の言うように動物の鳴き声をまねながら逃げ帰った。

狂言「居杭」と森三郎の「るぐひ太郎」を比較すると、おもしろい違いがある。（新日本古典文学大系58「狂言記」を参照）

①頭巾の効力・・・狂言では、頭巾を被れば頭を張られても痛くないだろうと思っていたのが、出入りする家の亭主の前で被った時に姿が消えると初めて分かる。森三郎の「るぐひ太郎」では、頭巾の力に気づいてから、「ようし！」とおじをびつくりさせようと出かけることにしている。

②結末・・・狂言では、亭主と算置（占い）両者がいさかうように仕向けた後、とうとう居杭が姿を現して逃げていく。「るぐひ太郎」では太郎は柿の木に登って高みの見物をしていたが、次から次へ鳴きまねをさせられの閉口して逃げ帰る。太郎は姿を見せず、いつもは食べさせてもらえない柿を袂に入れて逃げ帰る。

森三郎は「ひょうきんものの甥」にたっぷりいたずらをさせている。柿の木に上る場面はこの先も時々出てくる。子どもの頃の自らの経験があるのだろうか。